剣道実技の授業展開における映像教材の可能性
―武道における心の葛藤を伝える映像を用いた授業の試みを通して―

鍋山隆弘

Possibility of video education in class of practical Kendo skills

Takahiro NABEYAMA

1　はじめに

剣道の振興を図るには，どういう方法が有効であるか。特に，学生や大人を対象に，剣道に関心を抱いてもらうためには，どのような働きかけ（教育）が効果的であるか。この問題について，授業での経験，反省をもとに考えてみたい。

さて，剣道を経験したことがない者が，運動をする必要性を感じたり，体育の授業での種目選択などの際，「剣道」を選択する者がどれくらいいるであろうか。剣道を経験した者であれば，その選択肢に「剣道」をあげる者もいるであろうが，剣道は，経験以外からくる情報が少なく，また，イメージが良くないためか，剣道は選択肢にすらされ難い種目である。

剣道の情報が少ない原因の一つが，メディアに取り上げられないことである。周知の通り，映像を通しての情報はインパクトがあり，野球，サッカー，テニス，バレーボールなど，多種のスポーツ映像は，テレビを介して映し出されている。さらにそこには高度な編集技術により，あらゆる角度，リプレーやスローモーションによる明確な映像と，解説やナレーションによりその選手の状況や内面が語られている。この映像を通して，感動を覚え，興味を抱くことは多々あるであろう。

しかし，そこに剣道が映し出されることは極端に少ない。見たこともないものに興味を示すことはなく，この時点で前述した種目選択の枠から外れているのである。

では，映像を用いて剣道の情報を与えてみてはどうであろうか。ここで紹介する授業では，取り上げられることの少ない「剣道」を，NHKが「ドキュメント日本」で取り上げた貴重な映像を用いた。この映像は，剣道の八段審査を舞台に，二人の八段を目指す剣士の心にスポットをあて，剣道に何を求めているのかがうまく映し出されている。

剣道の振興を考えると，まずは関心を抱いてもらうことで，これはまた，剣道の実技授業にも言えることである。基本動作の修得に時間を要し，楽しさの一つである相手との駆け引きができるまでにさらに時間を要する時期に，積極的に実技に参加してもらうためには，この関心を抱かせることは必要で，剣道の振興，実技の充実を考えたとき，今回の映

像を用いた授業がヒントを与えてくれるのではないか。

2　授業概要

(1)　総合科目について

筑波大学体育センターでは，平成8年より「メディアに見るスポーツ」という総合科目を開設している。総合科目とは，「一般教育の充実をはかるためいくつかのユニークな方法を積極的に取り入れたその中の一つであり，広い視野からものの見方や考え方を身につけさせるとともに，学際的な観点に立った学問の重要性などを学ぶ」ことを目的とする科目である。学生は，通年で「総合科目A」を卒業までに2科目（6単位）を履修しなくてはならない。ちなみに平成11年度は全部で49科目が開設され，「メディアに見るスポーツ」はその中の一つである。推薦科目としてそれぞれの学群・学類の教育方針に基づいて特に重要であると考えられる科目を推薦しているが，筑波大学の1，2年の学生約6,000人が自由に履修できることになっており，学生は，シラバスや先輩のアドバイス等を参考に科目を選択している。

(2)　「メディアに見るスポーツ」について

「メディアに見るスポーツ」は，「メディアに取り上げられた感動的なスポーツのニュース，ドラマ，ドキュメンタリー，競技会，デモンストレーション等を鑑賞し，情的，知的好奇心を満足させると共にスポーツの限りない魅力へ動機づける」という授業概要のもと，週一回75分，通年にわたって展開されている。

授業ではまず，授業責任者が担当教官を紹介し，担当教官は，予定されたテーマに沿って映像を用いた講義を行う。最後に学生は240字程度の感想を書くことになっている。学期の中間には「学生の声」と題して，提出された感想を紹介する。これによって各々の学生がどういった感覚で映像をとらえていたのか，また，どういった感想を述べているのかを知る。成績評定は，授業後の感想のほか，授業2回につき1回の割合で課されるレポート，学期末の試験及び出席日数をもとに下される。学期末試験は，学期で最も印象に残った授業のテーマを取り上げ，その授業のテーマに対して論じる他，授業の講成に対しての批評や，今後この授業に期待することなどを書くことになっている。

(3)　授業のテーマ，動機について

授業者は，この授業の一単位時間を「武道とスポーツ」というタイトルで担当した。武道である剣道は，余暇を楽しむ目的で生れた多くのスポーツ種目とは違って，人を斬り殺す手段として技術が組織的に形成されたものであった。幕末になると，稽古を通しての人間形成といった教育的な意味合いも強くなり，この精神が現代に伝わり，心身鍛練の手段，精神修養や人間形成への道と位置づけられている。剣道は，身体能力や体力を技術や精神面でカバーできる特性があり，高齢になっても，基本が身についていれば，20代の若者とも対等以上に対戦することができる。身体能力の高い年齢期には，相手の攻めに対して体勢が崩れてしまったときでも，打ち込まれないようにかわすことは難しくないが，身体能力が落ちてくれば，体勢が崩れると打ち込まれてしまう。身体能力が低下するほど，攻めに負けない精神力と技術の工夫が求められるわけである。それゆえ指導者も礼儀作法の修得に厳しく，生涯を通して剣道を追求できるような剣道の基礎を徹底して指導していく。

多くのスポーツは，加齢につれて身体能力が低下し，活動それ自体を継続していくことが困難になるが，剣道は，身体能力の低下を精神力でカバーし，長年培われた洞察力を武器に相手と戦っていく。体力や運動能力だけに頼らず，自分の心を乱さない，強靱な精神力を求めることによって，剣道本来の目的である精神の修養，人間形成の道を進んでいくことができる。

しかし，試合に勝つことや，強くなることを目標としている少年期や青年期には，剣道を生涯続けていく基礎作りとなる考えや，自分の内面に心を傾けるような境地などはなかなか理解しがたい。青少年期に道場などで剣道を経験したことのある者でもこういったことまではなかなか理解できないであろう。また，中学校や高校などの授業で剣道を習った程度では理解どころか，防具の異臭や冬場の寒さが身にしみたりと，剣道のイメージは悪くなる一方の状況下にある。寒さに関しては，精神力の強化につながるとの考え方はあるものの，理解し難いことなのであろう。

また，剣道の競技特性にも理解し難い要因がある。一つは，竹刀のスピードが速く《面》《小手》《胴》《突》といった打突部位に打突されたかどうかが素人目にはわからないこと。もう一つは，ただ打突部位に打突しただけでは有効打突（一本）とは認められず，打つ気，打つ剣，打つ体，すなわち気・剣・体が一体となった打突でなければ，これも一本とはならない。長年剣道をしている者には，対戦者どうしが技を出す体勢や状況がよく見えており，一本となる技なのか，そうでない技なのかを容易に判断を下せるが，衆目には一本の技かどうかの判断は難しいだろう。このような点をわかりやすくするためにルールを変えてしまう手もあるが，剣道界はそれによって精神力が勝敗を左右する剣道の技術特性がなしくずしになってしまうことを危惧し，現状維持の姿勢を貫いているのである。国際剣道連盟（IKF）の加盟国は39ヶ国40団体とあるものの，剣道がオリンピックに参加しないのもこのような理由によるものである。

現代では剣道は一般的にはそれほど理解されていないが，日本で生まれ，育まれた剣道には，古来から日本人が大切にしてきた素晴らしい道徳観や礼儀，精神などがしっかりと受け継がれいる。剣道の修行は，道場だけで行うものではなく，日常生活から道に精進するといった伝統がある。きちんとした挨拶や言葉使いなど，生活の中で心身を鍛えていくといった考え方は，現代にも受け継がれている。こういった伝統を日本人としてこれをまた次の世代へと伝えていく使命がある。国外の文化やスポーツを容易に受容してきた日本であるが，日本の伝統文化である武道に少しでも目を向けて欲しいと願っている剣道家は決して少なくない。

このような状況下にある剣道について，武道としての剣道とは何なのかを，剣道の昇段審査を通し学生たちに感じ，考えるきっかけとして，「心で闘う120秒　一剣道・日本最難関試験に挑む—」（NHK 放映ドキュメント日本）という映像を活用し授業を行なった。

(4) 授業の展開・構成について

1) 概　　要

授業科目

総合科目Ａ　「メディアに見るスポーツ」

テーマ

武道とスポーツ

日本で生まれ育った運動文化である剣道。一生涯を通して身体を鍛え，精神を練り，一瞬にかける。勝負に勝ちたい気持ちを抑え「相手の心までも打ち抜く」そんな一本を目指し，稽古を重ねる。勝ち負けで絶対視するスポーツとは少し違う，武道としての剣道に迫る

実施日

３学期　平成11年１月17日　月曜・２限（10：10～11：25）

対象学群・学類　全学群・学類生

2) 内容展開

①授業責任者より担当教官の紹介（10：10～10：15）

②剣道の歴史と映像鑑賞のポイントについての説明（10：15～10：25）

この授業は，映像を上映する際には教室全

体の照明を消す。雑談はないが，居眠する学生がでてくる。ましてや武道に関する内容の講義では，最初から期待も少ないだろうと予感していた。そこでまず，学生の集中心を喚起し，眠気を取り払うよう居合刀を抜いた。居合刀というのは真剣と形は変わらない。この刀を一振りしてから剣道の歴史について概ね以下のような講述を行なった。剣道は，剣術として刀を使って人を斬り殺す手段として技術が組織的に形造られものである。剣術の練習は，それまで形稽古が中心であったが，江戸中期に，防具や竹刀の原形が考案され，防具を着用し，竹刀を持って稽古する「打込稽古」が始まった。幕末の動乱期には，藩士の教育，訓練を強化するため打込稽古の剣術が振興し隆盛してきた。この頃から，試合稽古が中心となって，互いに勝負を争い，それを通して，心身を鍛えることを求めるようになり，現代においてもその考えが伝わっており，心身鍛練の手段，精神修養，人間形成への道と位置づけられている。

次に剣道の映像を見る上でポイントとなる「間合」と「中心線」について居合刀を用いて説明した。間合とは相手との距離のことであるが，足幅や体勢によって実際の体と体の距離とは違う間合がある。足幅を広くとれば，その場から下がり，相手の打突をかわしやすいが，遠くまで体を運び打突することは難しい。逆に足幅を狭くすると，遠くまで体を運び打突しやすくなるが，下がることは難しくなる。また，体勢もそうであるが，前傾姿勢は，攻撃に有利だが防御には不利であり，後傾姿勢は防御に有利で攻撃には不利である。両者の体の距離に変わりはないが，足幅や体勢で攻防の優位差がある。このように，足幅や体勢を含めた距離を間合という。「中心線」とは，相手の喉元に竹刀を向けた剣先の延長にある。お互いに竹刀の先端を喉元に向け，構え合った状態にすると，どちらかが相手の喉元から剣先が外れてしまう。お互いにこの「中心線」を取るために，喉元に向けられたお互いの竹刀の先端を払いのけたりもどされたりしながら，中心線の取り合いをする。相手の中心線をとって打突すれば技は決まりやすいが，中心線をとられた状態で打突すると，相手の竹刀が喉元にあたってしまい，喉元に相手の竹刀があれば，打突しても一本とならない。この「間合」と「中心線」は，打突を相手に決める重要なポイントである。

③映像上映（10：25～11：15）

この映像の舞台は，剣道の段位審査で最も難しいとされる八段審査である。この審査の合格率は，1パーセントを切ることは珍しくない。ここに登場する二人は，それぞれの思いを込めた剣道の修行をし，審査でその成果を試そうとしている。一人は，元全日本チャンピオン石田健一七段(48歳)。これまで4度審査に失敗し，稽古の成果が無意識に出るように心掛けた5度目の挑戦である。もう一人は，宮本海七段(78歳)。高齢になっても剣道の力は伸びると信じ，審査を20年以上受け続け，24回目の挑戦である。

④まとめ，感想欄への記入

（11：15～11：25）

剣道は，日本人によって考えだされ，日本人によって育てられてきた。日本の歴史を育んだ剣道は，相手に勝つ剣の技術だけではなく，古来から日本人が大切にしてきた素晴らしい道徳観，礼儀，精神性などをしっかりと受け継いでいる。しかし，現在の日本の人々にはあまり理解されていないように感じる。剣道の経験がなくとも，伝統文化である剣道がどういったものであるかを知ることや，剣道を通して学ぶことは必要であるし，また，日本人としてこれをまた後世へと伝えていく義務があると考える。

ある女子学生から聞いた次のような話を紹介した。海外で外国人に「このお茶を飲んでいただける人はいませんか」と聞かれた。その学生は茶道の作法を知らなかったので，そ

う聞かれても手を上げることができなかった。そうしているうちに周りにいた外国人が手を挙げ，堂にはいった作法でお茶を飲んだ。彼女は日本人として恥ずかしい気持ちになり，日本にもどってから茶道や華道を習い始めた。西洋の文化やスポーツは容易に受け入れてきた日本であるが，自国の伝統文化や武道に少しでも目を向け，理解を深めて欲しい。

3　映像の内容



日本最難関と呼ばれる実技審査によって合格者を決める剣道八段審査が５月は京都，11月は東京で審査が行なわれる。受験資格は46歳からで，７段に合格して８年以上の修行を積んでいることが条件である。審査は，実技の一次審査，二次審査（それぞれ２分間の立合いを２回行う），剣道形，筆記試験があり，この審査の合格率は，１パーセントを切ることが珍しくない。

この審査の受験者の中にかつて全日本選手権を制した剣士石田健一さん（48歳）の姿があった。石田さんはこれまで審査に４度失敗，今回が５度目の挑戦である。石田さんは選手時代に染みついた勝つための剣道が，八段合格の障害になっていると考えている。審査の基準は試合の勝ち負けではなく，不動の精神力が磨かれてきたのか，攻撃の気迫は本物か，審査員が受験者の心と技の両面を凝視している。単に打突部位にあたっただけでは合格できない。



剣道では竹刀を交えた瞬間から二つの攻めぎあいが始まる。中心線と間合の取り合いである。中心線の取り合いとは自分の喉元に向けられた幅３センチの竹刀の先端を払いのけたりもどされたりする微妙な駆け引きで，相手に中心線を取られたまま技をくり出せば自分が逆に突かれてしまう。間合は，相手との距離の取り合いである。１センチでも距離を読み間違えれば，技は死んでしまう。一撃をはなつべき瞬間は，間合と中心線，二つの探り合いのなかに眠っている。石田さんは，この攻めぎあいから快心の打突を繰りだそうと，毎日一人で早朝稽古を行なっている。

八段審査を20年以上受け続けている剣士宮本海さん（78歳）は，今回で連続24回目の挑戦である。今年の受験者721人のうち，70歳以上は112人を数えた。

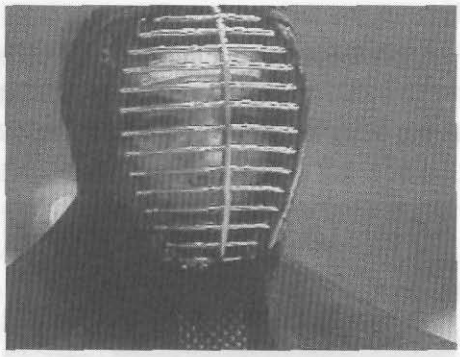


宮本さんは会社の役員を辞めた後，自宅の庭に道場を建て剣道だけに打ち込んできた。現在は子供から大人まで40人の門弟を指導している。宮本さんは戦争と戦後の混乱で10年以上竹刀を握ることができず，58歳で八段の

受験資格を得た。65歳の時に，初めて一次審査に合格し，以後70歳を過ぎてからも難関の一次審査に3回合格している。高齢になっても剣道の力は伸びるとの信念を支えてきたのは，昭和の剣聖と呼ばれ80歳を過ぎても現役選手を寄せつけなかった持田盛二（もちだもりじ昭和49年２月９日没）の言葉であった。持田は，明治に生まれ剣道十段を送られた不世出の剣士である。89歳で倒れるまで道場に立ち続け，剣道の神髄について次の言葉を残している（資料２）。

石田さんの一次審査が始まった。一人目の対戦相手，前半から中盤へ決定打なしと思われたが，相手が中心線を取り返そうと竹刀を寄せてきた瞬間石田さんの小手が決まった。二人目は，石田さんより５センチ以上上背のある大型剣士である。開始早々胴と小手を相手に浴びせたが，相手も一歩も引かず小手を取り返してはなおも果敢に攻め返してくる。

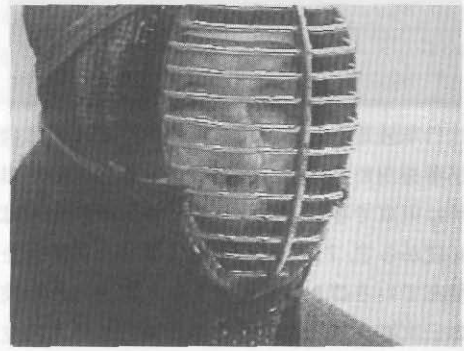
宮本海さんの心の修行の成果を試す24回目の審査が始まる。宮本さんは120秒間無心で攻

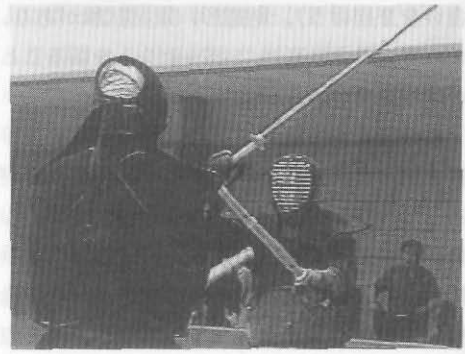






め抜くことを心掛けていた。宮本さんの一人目の相手は普段めったに対戦することのない二刀の使い手であった。宮本さんは，二本の竹刀で弛まなく攻めてくる相手に自分のペースを乱されないように注意していた。心の乱れを必死で押さえ込みながら戦った一人目120秒間の立会いが終わった。

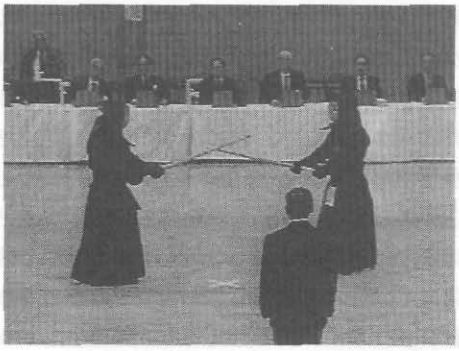




一次審査の結果，石田さんは５度目の挑戦で見事一次審査に合格したが，宮本さんは合格できなかった。一次審査の合格者は721人中60人であった。

一次審査に合格した60人の内６人が剣道形の審査で脱落し，二次審査に進んだのは54人

であった。二次審査は一次審査と同じく120秒の立会いを2回行う。一人目石田さんは，中心線と間合の奪い合いで，相手の心の動きを読む膠着状態が続いた。



石田さんは結果を恐れず快心の一撃を放つことだけに集中していた。残り30秒，相手が攻撃に出てきた。一方石田さんは相手が打ってくる瞬間を狙っていた。まず，相手の小手をかわしての面が決まり，そして終了直前にも相手が面を打ってきたところに小手が決まった。



二人目の相手は終盤に相手が襲いかかってきたところに面を決めた。石田さんは相手との間合を正確に読み切る心の落ち着きを最後まで失なわなかった。

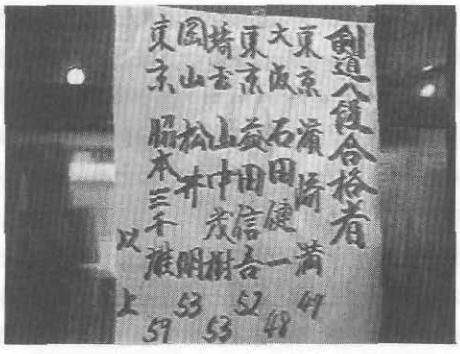
二次審査の合格者は過去3年間，受験者総数の1パーセント程度に留まっている。二つの会場に分けて行なわれた二次審査の合格者6人，その中に石田さんの受験番号も記されていた。

二次審査で合格した6人は，最後の筆記試験に臨んだ。問題は「剣は心なりなりという



教えについて自分の考えを述べる」というもので，石田さんは，答案の最後をこう締めくくった「剣道で一番大切なのは，おごらずに自分の弱点を認め，それを稽古で改めていく素直な心である」

夜9時八段合格者が発表された。見事に6人全員が合格，合格率は0.8パーセントであった。



4　学生の反応

学生には，レポートを2回提出させている。1回目は授業の直後に提出する240字程度の感想である。これは，授業の直後であるためか，映像のインパクトが大きいためか，感情的な反応が多くを占めているが，一週間後に提出されたレポートの方は，時間に余裕があるためか，冷静かつ沈着に授業を振り返っていて，授業後の感想に比べ，踏み込んだ内容の反応がみられた。

なお，授業直後の感想を資料2に示した。

(1)　感想文

①VTRの中の120秒間の立会いを見て，

VTRでもとても圧倒された。自分も6年間剣道をやっていたが，あそこまで張りつめた試合を見たのは初めてだった。石田さんの気合は，やはり，他の人よりも抜きんでていたと思った。剣先を見ているだけで，その心，争いの激しさが伝わってきた。(自然1年)

②初めて剣道という世界に触れたような気がする。もう本当に奥の深い素晴らしいスポーツだと思った。お年寄りになってもできるスポーツは幾つかあると思うけど，70歳を過ぎてからでも上達できるものはないと思っていただけに，持田氏のビデオも，淡々としているけど，まるで本当に相手の心を読んでいるかのように剣をさばいていて驚いた。自分にもこういうものが欲しいとすごく思った。生涯上を目指して何かをやっていきたい。(人間1年)

③剣道は国際的スポーツではなく，日本独自の武道という印象を強く受ける。相手との戦いよりも，己との対話，自己への挑戦という意味合いを強く感じる。石田さんと宮本さんの生き方，剣道への接し方には強い感動を受ける。己の道をつきつめていく人間の美しさを感じた。自分がこれまで手に触れることのなかった日本の文化，武道に強くひかれるものであった。最後に石田さんと宮本さんの剣道への考え方が同じであったことが印象的だった。(資源1年)

④とても感動したというのが私の一番の印象である。七段でさえすごいのに，石田八段はおごりたかぶらず，精神的にも人間ができていて，とてもうらやましく感じた。何であんなに強いのにえらぶらず地道に訓練できるのであろうか。一次審査，二次審査を終えた石田さんの顔はとてもすがすがしく，いい顔をしていたと思った。僕もあのような顔が自然にできるようになりたい。(資源1年)

⑤70歳を過ぎた人が100人以上も受けているのには驚いた。剣道は特別なものかもしれないが，そこまでして真剣に自分を磨こうとしている人はかっこいいなあと思った。(社工1年)

⑥とてもおもしろかった。剣道がこんなに深いものであることを初めて知った。人生に似ている気がする。ほとんど何も知らない私がこんなことというのもおこがましいけれど，自分をかけるに足るものだと思う。ただ単にスポーツではない。とにかく，感銘を受けた授業であった。(国際1年)

⑦久しぶりに良いものを見ました。スポーツは，体だけではなく心が大切であるが，剣道はその中でも最も心が大切なものであると思う。日本の伝統と歴史のある剣道を，もう一度再確認できて良かった。(国際1年)

ここに上げた感想文を見てみると，高齢になっても剣道を続け，なお，その成果を試そうと八段審査を受け続けている姿に感動していることが伺える。毎回受験者の1パーセント程度しか合格しない審査であるにもかかわらず，挑戦者は減らない。「生涯をかけて己の剣道を作りあげる」といった考えのもとに修行を積み，剣道を通して自分自身を磨き上げていこうとしているからである。学生はこの考え方に共感を覚え，生涯をかけて何かを追い求めていくことの素晴らしさに気付いてくれたのではないか。

感想文の中には「奥深さ」とういう言葉が出てくる。「奥深さ」とは，立合の中に存在する相手との駆け引きが，単にその場での身体の反応だけではなく，修行の過程における心の葛藤や，「会心の一本」の意味の重さを感じたからこそ，この「奥深さ」という言葉が出てきたのではないか。

何事もそうであるが，何かに没頭し，懸命な姿は美しい。しかも，今回の二人は，人生の円熟期において一層輝いている。この輝きの源が克己心であろう。

(2) レポート

①私は，国際関係学を勉強しており，将来は国際的な舞台で仕事に就きたいと思っている。グローバリゼーションが進行している現代においては，むしろ国民としてのアイデンティティまたは世界における一つの地域としての特徴が，重要性を増してくるといえるだろう。その様な時代において，日本は何を持っているかと考える時，私は何があるのだろうと考え込んでしまう。島国として独自の文化を育んできたはずの日本がどこからか日本的なものを失ってきているという観を抱かずにはいられない。建築様式にしても，詩歌やお茶などの芸術にしても日本独自のものは薄れつつあるように思う。今までの私は，それを仕方がないことだと思っていました。人々が生きていく中で文化があり，その中で失われていくものも多々あるのだろうと思ってきた。しかし，今回の授業を受けて私の考え方が変わった。真に日本的で心から美しいものがあると感じた。それは，剣の道に生きる人々の心である。個々人の日々の鍛練は彼らの心によって支えられ，彼らを確かに強くするものだと感じた。侍には，その様な心を持ち，また「和」を大切にするという日本の精神があったからこそ，日本の侍集団の強さというものは素晴らしいものだったのではないかと思う。現在において侍の心は剣道の中に生きていると思った。私は剣道をやったことがないしこれからもやる機会があるかわからないが，彼らの心を引き継いでいきたいと思った。勝負所での心力を強く保つために努力しようと思った。自分の中に研ぎ澄まされた心と刀をもって生きていきたいと思う。(国際2年)

剣道をやらなくとも，剣道に関心を持って欲しい。剣道の精神を日本人として受け継いで欲しいと考える授業者の意図を受け止めてくれたレポートである。舶来の文化やスポーツは容易に受け入れてしまうものの，日本古来の文化・様式などに目を向ける姿勢が稀薄になってきている。日本には，日本独自の素晴らしい伝統文化や武道がある。そこにある日本人らしい作法や美的感覚などを引き継いでいこうとするきっかけをつかんでくれたのではないか。

②はっきり言えば，授業の最初はそれほどこの剣道というものに期待はしていなかった。しかし，本当に集中してこの授業を受けることができたし，剣道というものが，人生を通して精進に励むに値する，むしろそれ以上のものだと思うようになった。剣道をやっていた友人の話によると，剣道はあくまで道であるから，オリンピック種目には成り得ないのだという。柔道は同じく道であるけれど，国際化してオリンピック種目として，いろいろな面で合理化が進んでいるという話を前の授業で聞いた。柔道の合理化について先生は当たり前だとおっしゃっていたが，しかし，納得できない部分もあった。私の友人が言うには，そういった合理化を剣道は避けているらしい。剣道は，ビデオを見てもよく分かったけれども，心を大事にしていると思う。ビデオで八段に挑戦していた2人の剣士の方々も，技よりむしろ心を重視していたのではないかと思う。自分の心をコントロールするのは，とても難しいことだ。八段昇段審査の受験資格もそういった面を考慮するからこそ，年齢制限が生まれてくるのだろう。そういう部分は失われるべきではない。今のような社会であるからこそ，剣道は，それが現在持っているスタンスを崩してはならないと思う。私が日本人であるからかもしれないが，剣道は剣道が持つ日本的な面を維持していってほしい。剣道を初めて見たような私が偉そうな事はいえないけれども，柔道のようになってほしくはないし，もちろん様々な人々に門戸を開くのは大切なことだが，それと，根本的なスタンスやシステムを変えることは別物だ。私が

ひかれたのは今の剣道であるし，本当に魅力のあるものだと感じたのだ。それにしても八段審査があれほどの難関だとは驚きであった。あの緊張感には凄まじいものがあった。剣道の魅力を知ることができた授業だった。(国際1年)

このレポートは，剣道界が今後かかえる核心をついたものである。剣道を実践している者でも剣道の将来について考えている者は少ない。剣道が世界に広まるにつれ，ルールが理解しやすいよう合理化される流れ，方向は必至で，今後は精神性や現在の様式を残していくことは難しいであろう。何を残し，何を変えていくかの選択は，問題が表面化する前に剣道界が対応していかなくてはならない大きな命題である。変えざるを得ない状況になってからの対応では，心の問題は軽視される恐れがある。世界普及とそれに伴う合理化は，切っても切れない関係にある。剣道の経験のない者でも，この度の映像を通してここまで考えてくれたことは，剣道を志す者にとって喜ぶべきことでないだろうか。

③とにかく映像に引き込まれてしまった。今まで私が思っていたイメージとは全く違う初めて剣道という世界にふれて新鮮な感動を覚えました。

一生のスポーツとして自分のやってきたスポーツを一生したいと思っていると思っています。私もその一人で，決して本格的にやれるほど上手ではないけれど，小学校から続けてきたバスケットボールを一生続けていきたいと思っています。しかし，私の考えていた一生とは長くても50代くらい，それを過ぎたら走ったりすることはできないかなと思っていました。しかし，剣道は違いました。他にも80代になってもできるスポーツはあるかもしれない。しかし，60代70代になっても上達できるスポーツは，他には思いつきませんでした。80近くになっても八段審査に挑戦し続ける姿に素晴らしいともうらやましいとも思い，本当に感動して鳥肌が立ちました。

そしてすごいと思ったのが，持田盛二氏の剣道です。私には，もう相手の心が読めるんだとしか思えませんでした。次にどういった攻撃が来るのか分かっているように，すっと受けていくのは驚きのあまり口が開いてしまいました。心の修行のたまものだと普通に信じることができました。

この授業を受けていつも思うことですが，どのスポーツにも必ずそのスポーツならではの人をひきつける魅力があって剣道もやっぱり当てはまりました。今まで私は剣道というものをやったことがないし，見たこともありません。勝手に自分の中で地味なイメージを作ってしまい，剣道の世界に触れようともしませんでした。しかし，今回講義を受けて，本当にかっこいいと思ったし，やってみたいなという気持ちになりました。目からうろこが落ちたという表現がまさにぴったりくる感じで，剣道をやってきた人々，そしてこれからずっと続けていく人がうらやましく思います。

これから自分が剣道にどうやって関っていくかわからないけど，積極的に剣道の世界に触れていきたいと思っています。(人間1年)

高齢になっても向上できるスポーツはいくつあるだろうか。剣道は，武道としてのスタイルを崩さない限り，高齢になっても道を求めることができる。これは単に打った打たれたの結果の勝負だけではなく，人それぞれが個々の価値観で，自分の内面に心を傾けているからである。この学生は，「地味なもの」としてしか剣道をイメージしてなかったが，八段審査に挑む剣士の戦いの深層にふれることで，高齢になっても上をめざし挑戦し続ける姿に感動している。この審査が単に試合の勝ち負けであったら，ここまで挑戦することが

できるであろうか。スポーツとは違った武道としての剣道に，この授業を通して気づいてくれたのではないかと思わせるレポートである。

5　剣道実技の授業展開における映像教材の活用について

授業者は，剣道に興味を抱いてもらい，武道である剣道を通して，日本の伝統文化を伝授する授業が理想であると考えている。今回の映像を用いた授業で，学生たちは様々な角度・視点から剣道を捉えてくれていた。

まず武道とスポーツの違いについては，武道は精神力や経験が体力や運動能力よりも尊重され，いついかなる時代でも己を磨き上げることによって完成されるものと捉えている。スポーツでのピークは，身体能力の絶頂期に訪れるもので，武道を極みは，必ずしも身体能力の絶頂期に訪れるものではなく，身体能力より精神力が雌雄を決する段階において初めて到達できる境地である。勝敗よりもむしろそうした境地を極めることが武道の目的であると彼らは解釈している。

また，武道を日本で生まれた伝統文化として捉えた者は，「道」という言葉の中に，文化・歴史の中でつくられた日本国有の精神や心が含まれていることを知り，「道」とつく他の文化領域（茶道・華道）の伝統や歴史を学ぶことの必要性も感じている。

さらに，これからの自らの人生について考えた学生は，生涯をかけて自分を磨くことの素晴らしさや，一生涯学ぶ姿勢が大切であることを知り，これからの人生をより価値のあるものに導くきっかけをつかんでいる。

授業によるこうした反応を実技の授業時間の中でどれだけ喚起することができるであろうか。剣道独特の運動形態（相手に打突したり，右足を前にだして左足を後ろにし，歩むことができない）は，日常の生活環境のなかには類似した動きがほとんどないため，そうした動きの基礎習得には時間がかかる。ましてや，今回の映像にみられたような心的状態が，竹刀操作を左右する水準に至るまでには，体得した剣道の技術が根底に必要で，この技術を身につけるまでには，更に多くの時間を必要とする。単調な基本動作のくり返しや，基本を十分に身につけていない状況で相手と打ち合っても，剣道の魅力（竹刀の微妙な動きから，どこの打突部位を狙っているのかを探り，間合の駆け引きから相手に隙を作らせ打突の機会を作る）の一つにさえ到達することは難しいであろう。

このように剣道の実技教育が抱える問題を解決するには，少しでも剣道本来の魅力に近づける努力が必要であり，効果的な映像を用いて，剣道への興味・関心を喚起し，モチベーションを高めてから実技に入ってはどうであろう。特に，仕方なく剣道を受講するような学生たちに対しては，こういった工夫が有効と思われる。今後そのことを実際の授業において検証していくことが課題となる。

参考文献

井上正孝，剣道と人間教育，玉川大学出版部，1994
高野佐三郎，剣道，島津書房，1986
高橋伍郎，授業の目標と内容によって指導法と評価法は変わる，体育の科学，48-(2)，1998
筑波大学総合科目編成室，平成11年度総合科目シラバス，pp.66～67
中林信二，武道のすすめ，中林信二先生遺作集刊行会，1987
新渡戸稲造，武士道，三笠書房，1933

資料 1

持田盛二
（もちだもりじ　昭和49年2月9日没）
剣道は五十歳までは基礎を一所懸命

勉強して，自分のものにしなくてはならない。普通基礎というと，初心者のうちに修得してしまったと思っているが，これは大変な間違いであって，そのため基礎を頭の中にしまい込んだままの人が非常に多い。

私は剣道の基礎を体で覚えるのに五十年かかった。

私の剣道は五十を過ぎてから本当の修行に入った。心で剣道しようとしたからである。

六十歳になると足腰が弱くなる。この弱さを補うのは心である。心を動かして弱点を強くするように努めた。

七十歳になると身体全体が弱くなる。今度は心を動かさない修行をした。心が動かなくなれば，相手の心がこちらの鏡に映ってくる。心を静かに動かされないよう努めた。

八十歳になると心は動かなくなった。だが時々雑念が入る。心の中に雑念を入れないように修行している。

資 料 2

感想文より今後の授業運営に対して参考となる意見・指摘が含まれているものを掲載した。

1．最難関と言われるだけあって，八段審査の内容はとても厳しかった。心の内面を重視するので，経験が大きな意味を持つという数少ないスポーツであるようだ。高齢になっても上達するスポーツは少ないと思う。剣道に対する人の思いは尊敬に価すると思う。一つのものを極めるというこの偉大さを感じた。（社会1年女）

2．私は小学生のころから，中学2年生ぐらいまで剣道をやっていて，初段を持っているのですが，その時はなんとなく稽古をしているだけでした。しかし，今日のビデオを見て，剣道における心の重要さみたいなものを感じました。私は今日のビデオを見て，剣道の奥深さみたいなものを見ることができ，とてもおもしろかったです。私は今，体育で剣道をやっているのですが，心を使って剣道をしたいと思いました。（社会1年男）

3．ビデオを見て，剣道はもはやスポーツ競技の中のひとつというのもではないように感じた。他のスポーツと比べて，技術だけではなく精神面が大きなウエイトを占めているように思う。プリントに書かれていたように，80歳を過ぎても修行を続けることは，他のスポーツでは難しい。今まで関心のなかった剣道に対して，奥深い競技だという印象を持った。（比文1年女）

4．私はこのドキュメントを3年前に見ましたが今日改めて見て新たに考えさせられたことが多々ありました。七段という高い段位の人があれほど謙虚な心で取り組んでおられる姿を見て，自分を振り返った時に恥ずかしい気持ちになった。自分はすっかり初心者を卒業した気になっていましたが，それが大きな間違いだったということを痛感しました。今はまだまだ基本を身体に叩き込む時期だと思いますので，寒稽古はこの気持ちで頑張りたいと思います。今日はどうもありがとうございました。（日日1年女）

5．剣道というのは，以前からスポーツという感じは希薄だった。これは日本人としておごった言い方かもしれないが，日本古来のスポーツと呼ばれるのもは特に心を大切にする部分が大きい。別に日本で生まれたものとは違うとは言い切れないけれども，やはりでどころが生死に関るところからだということが技に劣る優らず，心を重んじる姿勢につながっていると思う。心で闘う（闘うという表現は正しくないかも知れなが）姿は美しいと思う。武道とはどういうものか言い切れないが，この武道を極めるには一生以上かかるの

だと痛感している。(人間１年男)

6．剣の強さは，戦いに勝利することではないことだということがわかった。人に勝利することよりも，むしろ自分に勝利することこそが重要視されているのだろう。剣道は，剣の道だけを示しているだけではなく，人の道を示しているのだと分かった。(社工１年男)

7．スポーツにおいての一番の目標はやはり試合に勝つこと，優勝することであり，そのためにはあらゆる手を尽くすというのが常であるが，今日のビデオを見るとそういったことを超越したものを見たような気がする。真の敵は自分の心であるというのがまさにあてはまると思う。だからこそ生涯を通して続けていく意味があるのだと思った。(社工１年女)

8．剣道八段の審査がこんなに難しいものだとは知らなかった。剣道はとても奥が深いものだということもわかった。技やスピードなどではなく，心で闘うという意味はやはり少しわからないけど，ある程度まで上達した後は，心の問題なのだということが心に残った。(社工１年女)

9．私は剣道が心で闘うということが少し分かった。高校の時，少し体育でしたことがあって，こんな痛いスポーツはしたくないと思った。しかし，これを越えてさらにもっと修行を積んでいくと，剣道の面白さが分かってくるのかなと思った。気持ちが刀や体勢に現れるというのはありそうだなあと思うし，いま思えば高校のときもそうだったかも。(社工１年男)

10．剣道八段がどれだけ難しい審査であるか分かった。私は武道をやったことはないけれど，武道は精神力や経験が体力よりも重視されているものなんだと知った。日本人として一つくらい武道をやってみたいと思った。(社工１年女)

11．今までの授業の中で一番おもしろかった。中心と間合の説明のお陰で，ビデオの試合をちゃんと見れたような気がした。日々精進すること，剣道の中に生きている日本の素晴らしさだと思った。心の修行ということを自分も心にとめて生きていきたいと思う。(国際１年男)

12．とてもおもしろかった。剣道がこんなに深いものであることを初めて知った。人生に似ている気がする。ほとんど何も知らない私がこんなことを言うのもおこがましいけれど，自分をかけるに足るものだと思う。ただ単にスポーツではない。とにかく，感銘を受けた授業であった。(国際１年女)

13．僕は小学生の頃剣道をしていたが，技術的なことをきちんと理論や精神的裏付けと共に考えたことはなかった。八段というものが，こんなに難しいものだとしらず，僕の道場は，宮崎の修道館という道場だったのだが，館長が八段だったのは，すごいものだったのだなあと思った。精神的向上を目指す人々の素晴らしさを改めて感じた。(国際１年男)

14．今回の映像を見て，剣道がここまで厳しく，格調の高いスポーツであるとは知らなかった。剣道八段を取るために何年も修行を続けていくことは精神的にも身体的にも大変なものだが，それを通して向上する人間としての成長度は，はかり知れないものだと思う。(国際１年男)

15．身体能力の低下と共に形を変えつつ，精神を鍛えていくことができるもの，それがスポーツであるということは，剣道の広がりの大きさを現していると思う。自分の中身を見つめ続けることはとても厳しいことだけれども，だからこそだんだん精神が強くなっていくのだろう。(国際１年女)

16．剣道というのもがこんなに奥が深く，難しいものだとは思わなかった。ある程度のレベルに達するまでは技術の向上が第一だろうけれど，それを越えると，本当に精神力の向上，強さを鍛えていくことに集中していくんだろうということがよくわかった。(国際１

年女)

17. ビデオを見て，剣道の本当の難しさというものが分かったような気がしました。私も小学生のとき少年剣士を6年間やっていましたが，その時はただがむしゃらに相手に向かっていき，自分の技術を磨くことだけに専念して，大人の剣道もそうだと思っていましたが，剣道は体が衰えてきたら心でやるものだというのを教わり，剣道が本当に素晴らしい，日本古来のスポーツ（武道）だと思いました。（体育1年男）

18. 私は剣道はやったことがないが，その剣士の心意気武道の精神のすごさをありありと感じさせられた。八段を目指す剣士の年齢を越えてた軽やかな動き，集中力，かけひきは目をみはる緊張感があった。(芸術1年女)

19. ビデオを見て，武道とスポーツの違いを感じた。相手よりも，自分との戦いに勝たなければならない剣道は，スポーツよりも武道であるといえる。だからこそ，年齢を越え，人生をかけて行うことができる。武道は極めることができないものだと思った。(芸術1年男)

20. すごく良いものを見せていただいたと心から思いました。剣道ってわりと身近なスポーツだと感じていたけれど，自分が想像していたよりもすごいものだった。スポーツというよりもなにか精神的な，常に自分との戦いのような，自分を鍛え人生における意味のようなものを見いだすもののような感じがした。(芸術1年女)

21. 70代を過ぎてなおできるスポーツといえばゲートボールというイメージがあった。剣道がそんな高齢の方にできるというふうに思ってなかった。剣道はただ竹刀による勝負というだけでなく，精神鍛練の一つとして存在しているのだと分かった。ビデオの中の石田さん達の中に，一つの道を極めることの素晴らしさを見た。(芸術1年男)

22. はじめて剣道に触れた。日頃から，スポーツの身体的寿命について考えるところがあった。他のスポーツは極めるというのは，身体が若く，その絶頂期におこるものだと思っていた。しかし，これでスポーツにおける精神性の大きさが感じられた。選手の顔が研ぎ澄まされていたのが印象的だった。(芸術1年女)

23. 剣道がなぜ高齢になってもやれ，年齢を重ねるにつれて上を目指すことができるのかということが，今回のビデオを見てよく分かりました。心というものがここまで表面に現れ，それと，自分自身が闘うという武道という世界が，今の日本，これからの日本を考える上でも，その精神など絶対に失ってはならないものだと強く感じました。(芸術1年女)

24. 剣道八段が約1パーセントしか合格していないという事実に大変驚きました。剣道というものは，歳をとってからでもできる素晴らしいスポーツだと思いました。雑念を取り除き，精神を集中させるこの剣道というスポーツは，日本が立派に自慢できる文化だなと思いました。(芸術1年女)

25. 若い人と経験を持ち鍛えている人との差が大きいことが分かった。無心でいることや，素直であることの本質を教えてくれる競技であるのが日本の武道なんだなと思った。大人になっても他人から吸収できる大人でありたい。(芸術1年女)

26. 司法試験の合格率でさえも3パーセントであるのに，剣道八段の場合は更にそれを下回る1パーセント以下という事実に非常に驚いた。二十年以上も審査を受け続けても合格できないのは過酷で，ある意味残酷なようにも思えた。しかし，そこに情けというものを入れてしまったら真の武道家は生まれないし，公正に審査することの重要さを知ったような気がする。(社会1年女)

27. 剣道がここまで奥が深いものとは思わなかった。八段を取るためには試合の勝ち負けよりも，精神的な部分が評価されなければ

ならないところが，剣道の本質がやはりスポーツというよりも武道なのだということを実感させられた。(人文2年男)

28．120秒というとても短い時間に，自分の行なってきたことのすべてを出すという気合に満ちた試合の様々には，見ていた私の方も息がつまるくらいの緊張感があった。今まで剣道をこれほどきちんと見た事はなかったので，今までのスポーツとしてのイメージとは違う心に重点をおいた武道としての剣道というものを，少しだけではあるが感じられた。(人間2年女)

29．VTRをみていて，こっちが動揺してしまった。はじめに，剣道は殺し合いから始まったものだと聞き剣道は非人道的なものだと思ったのに，実際に剣道を見ると，その様な面はいっさいみてとられなかったからだ。確かにはじまりは，そういうものであったにせよ，現に今の剣道の状態を見れば，どういうものが剣道なのかはわかる。剣道は，それをやっている当人は心の動揺があってはならないものだが，周囲の見ている者を動揺させるものだと思った。(人間2年女)

30．今日みたVTRの中でおこなわれていた剣道八段審査，日本最難関といわれる由縁が少しだけ分かったような気がします。中でも最も私を驚かせたのが参加者が高年齢層であることでした。歳はとっても精神的には自らを鍛えようとする人達の姿は印象的でした。(人間2年女)

31．剣道のスポーツとして以外の面が見れる素晴らしい内容だった。小学生の頃剣道を4年間習っていたが，その時は武道の心を理解することができず，ただのスポーツとして捉えていたが，今日の授業を受けて考え方が変わった。武道としてしっかり成り立っている剣道はすばらしいと思う。(工学2年男)

32．おもしろかった。今，体育で剣道をとっているので少しの知識ならあり，よけいにおもしろかった。80歳近くになってもやっている人とか，とてもかっこいいと思った。驚いたのは八段審査は45歳を過ぎないと受けられないというところだ。何だか心の強さというものをすごく感じた。(工学2年女)

33．剣道をやったことがないし，見たこともあまりないのでよくわからないけど，とても奥が深いものであると思う。ビデオで見た八段審査に臨む人達には色々な人がいてその誰もが勝ち負けではなく普遍的な剣道の良さというものを求めていたと思う。それは前に出る気持ちであったり，いずれにしても心が強くなくてはダメだと思う。剣道の鍛練は心の鍛練，そう考えて良いと思う。つくづく奥が深いものだと思った。(工学2年女)

34．自分は小学生の頃剣道を習っていましたが，いま思い返してみると，技術よりもむしろ心や姿勢を教えてもらった気がする。(工基2年男)

35．宮本さんが言っていた「剣の道は，いつまでも学ぶことがあるので，何歳になっても学ぶ姿勢が大切である」という言葉を残した。武道とは違うが，私も工学の道において，いつまでも学ぶ姿勢を大切にしたいと思った。日本におけるスポーツは心を大事にしたものが多く参考になった。(工学2年男)

36．今まで多くのスポーツを体験してきたが，武道の中では柔道しか経験がなく，剣道を体験したことはない。だから今日ビデオを見ていてもどこがどう凄いか，ということは説明できないが，気合はひしひしと感じることができた。一度経験してみたい。見ていて，何か心の中でおどっている感じがした。(工基2年男)

37．正直言って寝ようと思ったが，今回のVTRはほんとうにおもしろくて，感動したため，見入ってしまい寝られなかった。(工基2年男)

38．本当に素晴らしかった。自分の弱点を素直に認める素直な心という言葉は，剣道に何十年も精進してきた人に言える言葉であっ

た。一つのことに打ち込めるということはとても素晴らしいことだし，自分自身授業でしか剣道をやったことがないが，剣道，武道のよさを感じた。(体育2年男)

39．スポーツというものは基本的に選手生命の短いものだと思っていました。歳を重ねる度に剣道に対する気持ちや，実際に対戦しているときの心が変わっていくそんなスポーツがあったとは知りませんでした。ビデオを見ていて自分が緊張するようでした。(芸術2年女)

40．剣道を現在行なっている人が同時に警察の職に就いているのは，それだけでこの武道というものが，他のスポーツと比べて身体能力以上に精神を鍛え，なおかつ人間性を養う上で非常に膨大は時間を要すること，そして，それが決して人を殺す為に使うのではなく，社会の秩序を維持するためになくてはならないものだなあと感じました。現在十段の方がいないとはこの世界の奥深さにとても思い知らされました。(芸術2年男)

41．私は昔から剣道に憧れていました。何故かわからないけれど剣道という魅力をどこかで感じていたのでしょう。今日，ビデオを見てその魅力とは何かをはっきりと感じることができました。技術を磨き上げることは勿論，どのスポーツにも当てはまるけれど，武道の場合は精神も共に磨き上げることによって完成される。武道の魅力とは，おごらず自分の弱点を認め，稽古して克服していくことにあるのだ。剣道の魅力に触れるチャンスがあってよかったです。(国際2年女)

42．今まで剣道という武道に全く興味を持たなかったが，今日のビデオを見て剣道の奥深さや，面白みがわずかではあるが見えたような気がした。他のスポーツでは，引退という言葉によってスポーツを離れる人が多いが，剣道には引退というのもがなく自分の一生を通しての勝負なのではないかと考えることができた。(国際1年男)

43．スポーツは普通，体力の充実している若いときほど有利で，よい動きや試合をすることができる。しかし最近スポーツ化してきているとはいえ，真の武道を志指す者にとって最も重要で，勝負を左右するには心・精神力であり，それを修得することで肉体を越えた上達を成すことができる武道のすごさを知った。武道とは動物としての人間の肉体を鍛えるスポーツとは異なり，人間を人間たらしめる精神を鍛える崇高なものなんだと感じた。(芸術3年男)